

季刊

BEST DOCTORS IN JAPAN™

第70号 2025年 10月

今月の
ベストドクター

順天堂大学 産婦人科学講座教授

北出 真理

困難を乗り越えて、日本女性のWell-being向上に挑む

開腹手術に比べ、体への負担が少ない低侵襲手術。その代表的なものが腹腔鏡手術だ。痛みが少なく、術後の回復も早い腹腔鏡手術は今では当たり前だが、危険な手術として反対が根強かった時代もある。困難な状況にあっても婦人科腹腔鏡手術の可能性を信じ、患者さんに寄り添い続ける北出先生に話を伺った。



順天堂大学 産婦人科学講座教授

北出 真理 きたで・まり

1991年順天堂大学医学部卒業。同年順天堂大学医学部産婦人科学講座入局。2001年に医学博士号を取得。03年に講師、07年に准教授就任。14年からは順天堂大学女性スポーツ研究センター 副センター長を併任。16年に順天堂大学医学部産婦人科学講座教授に就任、同年に女性低侵襲外科・リプロダクションセンターセンター長となる。21年より順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構の副機構長も併任し、現在に至る。

学会関連の資格は、日本産科婦人科学会の産婦人科専門医・指導医、日本産科婦人科内視鏡学会・日本内視鏡外科学会の内視鏡技術認定医、日本生殖医学会の専門医、日本女性医学会の女性ヘルスケア専門医、スポーツドクターなど。

学会の役職は、日本産科婦人科学会代議員、日本産科婦人科内視鏡学会常務理事、日本内視鏡外科学会理事、日本エンドメトリオーシス学会理事、女性スポーツ医学研究会会長などがある。

手術創が小さく術後の回復が早い 低侵襲手術を先導

婦人科の良性疾患として代表的なものに、子宮筋腫や子宮腺筋症、子宮内膜症、卵巣嚢腫などがある。命に関わらないことが多いが、痛みや出血、不妊などにより、女性の生活の質（QOL）に大きな影響を与える。

婦人科の良性疾患の手術は現在、低侵襲手術が主流だ。低侵襲手術には、腹腔鏡手術のほか、ロボット支援手術、子宮鏡手術、卵管鏡手術が含まれる。

順天堂大学産婦人科学講座では、年間800例前後の低侵襲手術が行われている。それを牽引するのが、同講座の教授を務める北出真理先生だ。「この手術で女性を救える」と確信し、腹腔鏡手術の黎明期からその習得に力を注ぎ、現在までに8,500件もの腹腔鏡手術を執刀している。

「開腹手術では、臍部から恥骨の近くまで15～20cmほど切開することにもめずらしくありません。しかし腹腔鏡手術なら、体に5～12mmの穴を数か所開けるだけで済みます。そのため痛みが少なく、回復も早い。

患者さんに『手術翌日には歩ける方が多いですよ』とお伝えすると、皆さん安心されますね。仕事や家事に忙しい現代の女性にとって、体への負担が少ない腹腔鏡手術は、メリットが大きいと思います」

「女性の助けになりたい」と 選んだ道で生涯の師と出会う

先生が生まれ育ったのは、三重県松阪市。父は産婦人科の開業医だった。平日は手術や分娩に追われて深夜近くに帰宅し、休日はしょっちゅう病院から呼び出される父を見て、「医師は大変そうだ。私には向かない」と思っていた。しかし将来の進路を考えたときに、「確かに大変な仕事だけれど、人の命を助ける素晴らしい仕事かもしれない…」と思い直したという。すでに高校3年の夏だったが、そこから猛勉強し、順天堂大学に合格を果たした。

当時の順天堂大学は、2つの学部しかなかった。「病気を治す」医学部と、「病気にならない体を作る」体育学部（現・スポーツ健康科学部）の1年生は、寮生活が義務付けられているため仲が良く、学部の垣根を越えてイベント交流も盛んだった。

「私は、軽音楽部、コーラス部、バドミントン部と3つの部活を掛け持ちしていました。バドミントン部では女子部長を務め、軽音楽部ではボーカルやキーボード担当としてステージに立ちました。勉強は大変でしたが、大学生活はいま思い出しても楽しく、充実していましたね。子どもが好きなので、専攻を決める



患者さん一人ひとりの声に耳を傾けながら、妊娠出産を含めた女性のライフコースをプランニングする



↑尊敬してやまない武内裕之先生。
←武内先生の手術に助手として参加できたときの貴重な一枚。

際は小児科にも興味がわきましたが、自分が婦人科を受診してみると、驚くほど女性の産婦人科医が少ないことに気づきました。男性医師に診てもらうことに抵抗があった時代、女性たちの助けになりたいと考え、産婦人科医になることを決めました」

1991年に順天堂大学医学部産婦人科学講座に入局。当時は入局者が少なく、その年唯一の産婦人科入局者であり、医局では2人目の女性医師であった。充実した大学生活から希望する医局へ。日の当たる道を歩き続けてきたように思えるが、すべてが順風満帆だったわけではないという。

なぜなら、当時の医局は完全なる男性社会だったからだ。特に時間が不規則で、精神的にも肉体的にもハードな産婦人科の医局には女性医師が少なく、女性用の更衣室もなかった。先輩医師は皆優しかったが、「女性だから結婚や出産ですぐに辞めるのだろう」と思われて、戦力として見られていないことは、入局してすぐにわかったという。それが悔しくてたまらず、がむしゃらに頑張った。自分の健康を顧みる余裕はなく、疲労やストレスから月経が1年以上止まったという。そんな中、北出先生に対して男性医師と同じように接してくれたのが、同医局の講師（当時）であった恩師・武内裕之先生だった。

「武内先生は非常に優秀かつ正義感の強い先生で、先輩であっても間違っていると思ったら迷わず指摘していました。とても後輩思いの先生でしたが、仕事では大変厳しく、当時要領の悪かった私は、先生からたびたび怒られて、ときにはげんこつが飛んでくることもありました。この間、映画『かくかくしかじか』を観たのですが、主人公を一人前の画家に育てようとす

る美術教師が武内先生と重なって、とても感慨深い気持ちになりました」

腹腔鏡手術をマスターするため 手術室に通い、学んだ新人時代

武内先生は、順天堂を国内で有数の婦人科腹腔鏡施設とした立役者である。国内でも早い時期から腹腔鏡を取り入れた同院は、1994年には腹腔鏡検査、1996年には腹腔鏡手術を開始。腹腔鏡の可能性を確信した武内先生は産婦人科内視鏡チームを立ち上げ、若手外科医でも安全かつ効率的に手術手技を習得できる腹腔鏡教育システムを作り上げた。

「私が入局した1991年は、武内先生を中心に医局全体が『これから新しい時代が始まる』という期待や興奮に満ちあふれていました。当時は右も左もわからない新米でしたが、その雰囲気を感じてきたことは、医師として大きな財産です」

他の施設に先駆けて腹腔鏡手術が行われた際には、先生も間近で見学することができた。

「腹腔鏡手術では、おなかの中をモニターに映して施術するので、患部がはっきりと見えます。初めて鮮明な画像で骨盤内を見たときには、その美しさに息をのみました。また驚くほど少ない出血量や創の小ささ、患者さんの回復の早さも衝撃的でした」

その日以来、「絶対にこの手術ができるようになりたい」と思い、いてもたってもいられなくなったという。しかし難易度の高い手術に、新人医師が参加できるはずもない。

「まずは見て覚えるしかないと思い、腹腔鏡手術があると聞くと毎回、第2・第3助手や見学を志願したんです。結果、山積みだった仕事がさらに溜まり医局に泊まる日も増えたのですが、周りが呆れるほど手術に没頭しました」

そんな北出先生の姿を、指導医である武内先生は見ていたのだろう。ほどなくして、学会発表のための手術の映像編集を任されるようになった。何時間にもわたる手術の重要なシーンを切り取り、必要箇所をつないで短くまとめる仕事である。

「同じ映像を繰り返し見るうちに、手術の手順はもちろん、トラブル対応や、助手の動きを含めた手術の全体像が何となくわかるようになりました。数年後、初めて腹腔鏡手術を任された際に、緊張のなかでも不思議と手が動いたのですが、それはこの時期に繰り返しインプットした映像の効果かもしれません」

その後、腹腔鏡手術の経験を積み、1997年に順天堂大学医学部附属浦安病院へ。婦人科への導入に向け、率先して腹腔鏡手術を行った。

「クレイジーだ」といわれた手術 チーム一丸となって挑み結果を残した

現在、標準的な外科手術として広く普及している腹腔鏡手術。しかし日本におけるその萌芽期、1990年代には、懐疑的に受け止められていた。従来の開腹手術を支持する医師たちからの反対意見も根強かったという。

「当時は学会や院内でもたびたび『クレイジーな手術だ』といわれたものです。『長い鉗子を手の代わりに使う手術など、うまくいくわけがない』『合併症の危険が高いに違いない』など、散々ないわれようでした」

腹腔鏡手術は、開腹手術に比べて細部や深部がよく見える一方で、視野は狭まる。手技の操作性も制限されることから、慣れるまでは合併症のリスクも高い。批判的な見方が残るなか行われた当時の腹腔鏡手術は、失敗が絶対に許されないプレッシャーがとりわけ大きく、医局内の内視鏡チームが一丸となって取り組んだと振り返る。

「逆風が吹き荒れていましたが、粘り強く結果を出し続けたことで、院内でもじわじわと腹腔鏡手術を支持する医師が増えていきました」

腹腔鏡のカメラや機器の性能が向上 風向きが変わり始める

2000年に医学博士号を取得。2001年に本院の術者として独立した。外来での診療や手術に加えて、教育や研究、学会発表や論文にも力を注いだ。また同年には私生活でも大きな変化があった。



子宮筋腫に対する腹腔鏡手術。助手のほか臨床工学技士（写真中央）が手術に加わりカメラを操作することで、北出先生（写真右）が手術に集中できる環境が作られる

「同郷で気心が知れた中高時代の同級生と再会し、結婚しました。二人ともスポーツや旅行、お酒が好きで、意気投合したんです。平日はすれ違いの日々ですが、今でも月に1〜2度の休日は、できる限り一緒に過ごすようにしています」

この頃から腹腔鏡手術のカメラは光学式からデジタル式となり、3Dや4K/8Kのカメラシステムも開発され、器具や機器の精度は飛躍的に向上した。操作性が高くなり安全性も高まったことで、腹腔鏡手術の件数は次第に増加していく。「クレイジーだ」といわれていた手術への風向きが少しずつ変わり始めたのだ。

その後、内視鏡手術で一定以上の技術水準を持つ医師を日本産婦人科内視鏡学会が認定する「技術認定医」を初年度に取得。忙しくはあるものの、万事順調だった。

「もともと手術が好きで、それも夢だった腹腔鏡手術ができる環境をいただいたので、ハードではありましたが、毎日楽しく働いていました。結婚後も仕事のペースを落とすことはありませんでした」

突然訪れた、恩師との別れ 悲しみをバネに更なる高みを目指す

2008年、大きな試練が訪れる。恩師である武内先生が急逝されたのだ。長年の努力が実り、多くの良性

疾患に適応となった腹腔鏡手術を、悪性腫瘍にも広げようとしていた矢先のことだった。

「武内先生もさぞ無念だったと思いますが、カリスマ性のあるリーダーを突然失って、私たち弟子も途方に暮れました。忙しくても患者さんに寄り添う心を忘れない先生で、『患者さんは常に不安を抱えているのだからしっかり寄り添いなさい。経過が思わしくない場合は特に、何度でも患者さんのところに行って顔を見せること』とよくいわれたものです。医師としてはもちろん、人間としても本当に素晴らしい方でした」

しかし、残された医局員一同、「武内先生が心血注いで築き上げたことを途絶えさせてはならない」と、気持ちを立て直した。自分が一番年上だったこともあり、後輩たちを見守り、まとめて、武内先生から受け継いだ腹腔鏡教育システムを伝承するために力を合わせた。先生は、当時を振り返ってこう話す。

「武内先生の逝去だけでも本当につらいことでしたが、それを機に圧力や嫌がらせを受けることもあり、当時は本当に苦しい思いをしました。しかし『腹腔鏡手術をなんとしてでも発展させたい』という思いをもつ仲間とともに力を合わせることで、前を向くことができました。その絆は強く、今でも年に1度は集まって『武内先生を偲ぶ会』を開いています。仲間が武内



武内先生のご息女である武内詩織先生(写真左)が助手を務めた手術。北出先生(写真右)と固い絆で結ばれており、息もぴったりだ。

先生から受け継いだ技術を生かして、それぞれのフィールドで活躍しているのが嬉しく、誇らしくて、姉のような気持ちで後輩たちを見守っています」

また、現在多くの手術で北出先生の助手を務めるメンバーの一人に、武内先生のご息女である武内詩織先生がいる。父の後を継いで産婦人科医となり、順天堂に入職したのだ。父から娘へと手渡されたバトンを、先生が温かく見守っている。

波乱万丈な時期を乗り越えた先生は、その後学会活動にも精力的に取り組み、2023年には、内視鏡外科領域において全国で最も貢献した外科系の医師に贈られる「大上賞」を受賞。産婦人科医としては2人目、女性としては初の受賞となった

妊娠が難しい女性への治療のほか アスリートの健康課題にも取り組む

2016年には、順天堂医院内に腹腔鏡手術と不妊治療を専門とする「女性低侵襲外科・リプロダクションセンター」が開設され、北出先生はセンター長に就任。子宮筋腫や子宮内膜症などを合併した患者さんが、手術やホルモン療法、不妊治療を受けながら妊娠を目指す施設だ。

また、女性アスリートの健康課題にも積極的に取り組んでいる。より速く、高く、美しくなどの結果を求められる女性アスリートは、高い消費エネルギーに見合う十分なエネルギーを摂取できていないことが多い。そのためホルモン分泌が乱れ、無月経や貧血、骨

粗しょう症になりやすい。強いストレスに長期間さらされることから、メンタルヘルスの問題も抱えやすいという。2014年に始動した「女性スポーツ研究センター(JCRWS)」では副センター長を、2021年に設立された「スポーツ健康医科学推進機構(JASMS)」では、鈴木大地(現・参議院議員)機構長のもと副機構長を務めている。女性アスリートの健康課題を明確にし、医学的なサポートを行うことで、女性スポーツ界の競技力の強化を目指しているという。

研究や社会実装に取り組み 生きづらさを抱えた女性を支援

生殖内分泌(不妊症)から女性医学、(鏡視下で行う)婦人科低侵襲手術までを専門とする先生は、思春期から更年期以降まで幅広い年代の女性を診察している。

「診察室で多様な困難を抱える患者さんの声を聞くうちに、治療や手術で疾患を治すだけでなく、生きづらさを抱えた日本の女性たちをもっと健康に、幸せにしなければと考えるようになった」

そのためには社会全体の仕組みから変える必要があると感じ、2023年から内閣府の第3期SIP(戦略的イノベーション創造プログラム)に携わっている。



内視鏡外科領域で最も貢献した外科医に贈られる「大上賞」を受賞



産科・婦人科のスタッフ一同(前列右2人目が先生)。女性が健やかに生きていけるよう、スタッフで情報を共有し、最善の治療法を提案する

SIPは、社会的に重要な課題の解決を目的として研究や開発を行うプロジェクトで、先生はサブプロジェクトディレクターを務める。

「月経随伴症状や痛み、貧血などの症状があっても誰にも相談できず、症状が進行したり、不妊症となる女性たちを数多く診てきました。縁あってこのような役目をいただいたので、女性特有の健康課題や妊産婦・子育て女性の大変さ、プレコンセプションケアの必要性を、男性など当事者以外の人たちにも幅広く知ってもらい、日本女性のWell-being向上に向けた取り組みに力を入れていきたいと考えています」

先生は、自身について、「縁があって」「縁をいただいて」と語ることが多い。しかし運を引き寄せ縁をつなげるには、確かな実力はもちろん、新しい世界へと飛び込むチャレンジ精神も必要だ。常に前へ前へと進み続ける先生だからこそ、さまざまな縁や運がつながっていくのだろう。

座右の銘は「継続は力なり」。物覚えが悪く、レジデントとしては優秀ではなかったというが、コツコツと努力したことで、婦人科分野の低侵襲手術のエキスパートとなった。今では、国内外の学会や団体、自治

体、企業等からのオファーにより、年間20回以上の講演を行うなど、多忙な日々を送っている。先生に憧れて、腹腔鏡手術やロボット手術の習得を目指す女性医師も少なくないという。

「外来を苦手としていた時期もありましたが、多くの経験を積んだ今は患者さんとの会話が楽しく、以前より患者さんの声に寄り添えるようになったと思います。女性の人生はさまざまです。たとえ典型的な症例でなかったとしても、『この患者さんにとって最適なことは何か』を考えた、オーダーメイドの治療がやることができるようになったと感じています。こうして医師も、何歳になっても成長するのかもしれないね」

そういつて笑う先生の笑顔は、人を包みこむような優しさにあふれている。「誰にもいえなかった不調や悩みを、北出先生になら打ち明けられる」という患者さんが多いというのもうなずける。

女性の心身の健康は、社会全体にとっても重要な影響を与える。そのためには政府、自治体、医療機関、各種団体や企業が一体となって取り組む必要がある。日本女性のWell-being向上を目指す北出先生の挑戦は、これからも続く。🌐



子宮内膜症の診療に携わる医療関係者や研究者が集う「日本エンドメトリオーシス学会」。先生（前列写真中央）は、「第45回 日本エンドメトリオーシス学会学術講演会」で学会長を務めた。

お知らせ

日本におけるベストドクターズ®・サービスは日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● 株式会社法研 (ベストドクターズ・サービス日本総代理店)

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。

永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。



● ベストドクターズ事業

ハーバード大学医学部教授により1989年に創業したベストドクターズ社のもと開始、2002年に日本に進出した事業です。現在は、2017年に合併した米テラドックヘルス社のもと鋭意展開されています。テラドックヘルスは、一般的な医療相談から重篤疾患、身体疾患からメンタルヘルスにいたる一般向けサービスのほか、医療機関向けのデバイスまで幅広い仮想ヘルスケアソリューションを提供する、ニューヨーク証券取引所上場企業です。日本では、「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」のご照会を柱とした各種サービスのほか、医療機関向けデバイスを提供しています。

ベストドクターズ記念盾

ご選出記念盾に関するお問い合わせが増え個別のご対応が難しくなりましたため、本誌にて概要をご案内させていただきます。お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。

なお、2022年5月1日お承り分より新デザイン（右下の画像に準じたデザイン）にリニューアルしております。材質に変更はございません。また、従前どおり、過去のご選出年度（2022-2023、2020-2021、2018-2019、2016-2017、2014-2015、2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）でもお承り可能です。過去の選出年度の盾も、新デザインになります。

記念盾はオーダーメイドの性質上、注文主様・送付先様のご都合による返品・交換・ご注文後のキャンセルはお受けできません。あらかじめご理解の上ご注文いただきますようお願いいたします。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg

【価格】34,000円（送料込・税別）

【納期】お申し込み後8週間程度

氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「Prof.」「M.D.,Ph.D.」等からご選択いただけます。

e-mail : tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



本誌『BEST DOCTORS IN JAPAN』のバックナンバーがご覧いただけます。 <https://bestdoctors.com/japan/about-us/resources>

Teladoc
HEALTH

 **Best Doctors®**

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複製、複製、転載することは禁じられています。

日本総代理店 株式会社 法研

〒104-8104 東京都中央区銀座1-10-1 Tel.03(3562)8404

<https://www.sociohealth.co.jp/>

<https://bestdoctors.com/japan/>

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japanは、米国およびその他の国におけるBest Doctors, Inc. の商標です。Best Doctors, Inc. は、Teladoc Health, Inc. およびTeladoc Health International, S.A.U.の一員です。Teladoc Health、Teladoc および TeladocロゴはTeladoc Health, Inc. の商標です。